

## 山本作次郎先生を偲んで

平成元年九月二十六日、山本作次郎先生が逝去された。明治四十年四月九日のお生れであるから享年83才ということになる。筆者の恩師、石橋雅義先生のよき海洋化学共同研究者であられた。

山本先生は昭和五年京都大学理学部化学科金相学教室を卒業され(旧姓越野)、直ちに故郷に帰り、鳥根県立大田中学校教諭に就任、ついで同十八年六月当時の鳥根師範学校教授に栄転されたのであるが、これが学制改革により今日の鳥根大学教育学部となり、文理学部助教授を経て同三十四年教授に就任され、以降四十六年に御退職になるまで研究教育に専念され、ご退官と共に名誉教授として県の各種委員を兼ね後進の指導に努力してこられたところである。

後述するように先生の御出身は金相学研究室であるが、研究領域は広範にわたりその御性格そのもののように融通無碍である。最初は石橋雅義先生につかれて学位論文「抽出法を用いる分析化学及び分離化学的研究」に取り組み、特にウラン、ストロンチウム、セシウムといった核燃料、或いはその分裂生成物である諸元素について、有機溶媒抽出分離と濃度の研究を基礎的に行なわれ、優れた成果を挙げて学位を取得されたが、これらは放射性核種の抽出分析が常識となる初期の開拓に参画されたことを意味している。現にその後先生はその成果を手段として放射性降下物の影響研究や人形峠産のウラン鉱石の分析に取り組み、先駆的な成果を挙げられると共に、独創的な新ウラン精錬法を案出し、その特許は国内業界から表彰されたばかりでなく、米・ソ・西独などの関連研究機関でも検討されている程、優れたものであった。その一方で放射性フォール・アウトの自然界における影響については広く海水、海藻、魚類、土壌など日本海西地域地区を中心に広い範囲で基礎的に検討され、早い時期においてそ



れらの人体影響について警告されるなど啓蒙的な業績も著名である。

先生のお仕事はこれらに止まらず、例えば水酸化鉄沈澱の生成に関する分析化学的研究に基づいて、当時ようやく実用化され始めた磁気録音用テープの磁性酸化鉄粉の製造についても新しい貢献を行われるなど真に奔放かつ広範なもので、その天衣無縫ぶりに、われわれ若い研究者は目をみはる思いであった。

先生は当初教育者を志されたように、極めて温厚篤実な御性格で正義感が強く、四十数年にわたって研究教育に尽くされたので、その間に多くの優れた人材を育成されているが、他面日本古典音楽を愛し、ひょうひょうたる御性格によって哲人の風格があった。宍道湖、中海湖畔のご旧家にもお訪ねし、鳥根大学への講義にお招きくださった先生には、その御研究、海洋環境化学を通じて種々御教示頂いたが、その御研究は現在では橋谷博教授の率いるグループに受け継がれ大きな展開をしている。ここにご生前のご業績を回顧し、心からご冥福をお祈り申し上げる次第であります。

合掌

(藤永太一郎 記)